THE ザ・プレス PRESS 国際高

発行所
富山市願海寺水口444番地
富山国際大学付属高等学校
新聞部
ホームページアドレス：https://www.tuins-h.ed.jp
印刷所　北日本印刷株式会社

任命書を持つ生徒会執行部のメンバー。（左から）松本会計、飛鳥会長、井上副会長、早川会計

スポーツ 文化

この秋も大健闘！

英語弁論・プレゼン
練習の成果 発揮

この秋も、国際生は英語スピーチやプレゼンテーション、弁論などの各種大会で優秀な成績をおさめた。また、競泳の大上詩央里さん（33H）がイスラエルで世界選手権の大舞台に挑んだ。各大会での活躍をお伝えする。

大場さん（11H）2位、篠原さん（12H）3位
高崎市長杯英語弁論大会

第73回高崎市長杯英語弁論大会が10月22日、高崎経済大学（群馬）で行われ、中高生の部で大場愛真さんが2位（11H）、篠原愛怜さん（12H）が3位に選ばれた。

この大会は高崎市の取り組みにより始まり、現在は高崎経済大学英語研究部に引き継がれている日本で3番目に古い歴史あるコンテスト。優勝すると特大だるまをもらえることから「だるま杯」という通称で親しまれている。

4分30秒間程度のPrepared Speech（準備型のスピーチ）が審査対象。スピーチ原稿と音声データの予選審査を通過した5人が本選に出場するが、進めるのは各校2人までという制限がある。

大場さんは"Loss of a sister"というタイトルで、大場さんにとって姉のような存在だった愛犬のインディーが亡くなった時の体験をもとに、「命は儚いからこそ自分に与えられた時間を大切にして、愛する人と一緒にいる時間を一番良いものにするために努力すべきだ」と訴えた。

初めての大会出場に向けて、日々、先生や友達、家族に聞いてもらってアドバイスをもらい、改善していった。大会本番では自分のスピーチを聞いてもらうことと、他の出場者のスピーチを聞くことをとても楽しめたという。

2位という結果に「自分の伝えたかったメッセージが伝わった結果だと思い、とてもうれしかった」と喜びを語る。今後の目標として「ジャッジの方々から、他の大会にも出られるレベルだとお褒めの言葉をいただいたので、挑戦したい。いただいたアドバイスを生かし、よりハイレベルなスピーチを目指していきたい」と話した。

貰った賞状と盾と賞状を持つ大場さん（右）と篠原さん＝高崎経済大学

リサーチプロジェクトで2位
県英語プレゼンコンテスト

県内の高校生が英語でスピーチやプレゼンテーションを行い、表現力や情報の活用能力などを競い合う第24回県高校生英語プレゼンテーションコンテスト2023が10月21日、富山市民プラザで開かれ、グループでの研究成果について機器を用いて発表するリサーチ・プロジェクト部門で本校チーム（今中万佑花、黒田真立、堂川芽生、水本リアナ・全員21H）が優秀賞（2位）を獲得した。また、指定された英文を暗唱するレシテーション部門で長谷青依さん（11H）と松本恵茉さん（11H）、自分の考えや意見を発表するスピーチ部門で坂西容さん（21H）がそれぞれ奨励賞を受賞した。

このコンテストは、英語によるプレゼンテーションを通して自分の意見を伝える力や情報を生かす能力を身につけてもらおうと毎年開かれており、今回、3部門にエントリーした参加者は県内28校から116人だった。

審査では内容に加え、発音の正確さや身振りや手振りなどを含めた表現力について採点され、23日に結果が公表された。

リサーチ・プロジェクトの本校チームは"Fregrance's Impact ～Beyond The Nose～"というタイトルで、五感の中で最も原始的と言われる嗅覚に着目し、人々の購買意欲など香りが秘める可能性について表現力豊かに発表し、審査員から高い評価を受けた。

また、坂西さんは"See the Individual as a Part of the Whole"と題してスピーチした。

プレゼンコンテストに出場した本校メンバー

生徒主体の学校づくりへ
生徒会 飛鳥執行部が発足

今年度後期の生徒会役員選挙が9月26日に行われ、生徒会長に飛鳥慧子さん（23H）、副会長に井上幹生さん（28H）、会計に早川和樹さん（25H）と松本恵茉さん（11H）がそれぞれ当選した。新聞部は、生徒会執行部の4人にインタビューした。

【質問項目】
①今後の目標、頑張りたいこと
②どのような生徒会にしていきたい？
③学校をどのようにしていきたい？

生徒会長　飛鳥慧子（23H）

①生徒会のメンバーと協力しながら生徒主体となる学校づくりを目指していきたい。そのためには、自分たちの意識づけが大切。メンバーが全員共通理解をしていくことで自分たちの公約達成につながると思うので、しっかりと情報が行き通るようにみんなへの声かけを意識して行いたい。

②メンバー一人一人の意見が飛び交い、それぞれが自主的に行動できる生徒会にしていきたい。みんなが「楽しい」と思えるように自分からの声かけで明るい雰囲気を作ることや、自分の思いを素直に伝えることを意識していく。

③生徒が主体となって作り上げる学校にしていきたい。国際高は強みがたくさんあるのに、それらを上手く表現できていないように感じている。生徒や先生方が過ごしやすく楽しめる学校になるよう解決策を提示していく。

副会長　井上幹生（28H）

①まずはしっかりと公約を実現させ、方針でもある「皆で作る国際高校」の達成準備を進めていきたい。副会長として会長を支え、生徒会のメンバーと共に頑張っていけたら。

②様々な視点の考えがほしいので、役職や学年にとらわれず、本音で話し合える生徒会を目指している。

③学校生活や学習面、様々な場面において過ごしやすいと思えるような学校。実現のためにも、生徒の皆さんの意見を随時、目安箱にて募集しています！

会計　早川和樹（25H）

①前期でできなかった活動や、いま生徒会で話し合っている活動、自分が公約に挙げた活動などを実際に実践してその活動に意味を持たせていき、生徒全員で協力し作り上げていきたい。

②生徒一人一人の意見を取り入れ活発に活動できるような生徒会をメンバー全員で協力してつくり上げていきたい。

③生徒が楽しむ時は全力で楽しみ、集中する時は頑張る、この様なメリハリのある学校がステキだと考える。

会計　松本恵茉（11H）

①積極的に発言、行動してより良い学校になるようにしていきたい。

②生徒会は学校内の様々な生徒の声を代弁して考慮することが重要だと考えている。生徒の学習や学校生活のニーズに焦点を当て、サポートを強化していきたい。

③生徒に、明日も学校に来たいと思ってもらえるような学校にしたい。過ごしやすい環境にすることにより、生徒一人一人が学校や学習に対する意欲が高まる。

弁論
1～3位 独占 学生ユネスコ弁論大会

国際理解や国際協力をテーマとした第71回学生ユネスコ弁論大会（富山ユネスコ協会、県ユネスコ連絡協議会主催）が10月1日、富山電気ビルで行われ、本校生5人が出場して高校生の部で1～3位を独占した。

学生ユネスコ弁論大会に出場した本校生＝富山電気ビル

長谷川りえさん（15H）が1位、松田倫沙さん（21H）と川口亜蓮さん（23H）が2位、長谷青依さん（11H）と長谷川凛さん（21H）が3位を獲得した。この大会は「国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」の県代表者選考を兼ねており、長谷川りえさんは県代表として全国大会出場を決めた。

新聞部員でもある長谷川りえさんは、食品ロスとSNSの関わりについて6分間の主張を展開した。食品ロスの原因として、私たちの身近で最も関わりが深いのは食べ残しだが、SNSへの投稿のために注文した料理が食べ残され、食品ロス増加につながっている問題を指摘。『その投稿、本当に必要ですか？』というハッシュタグを作り、利用者に投稿が与える影響を再確認してほしい」と訴えた。

【4面に原稿全文を掲載】

「いろいろな問題について調べていくと、自分が知っているつもりでも知らないことの方が多くある。世界で起きている問題についてもっと調べたり、新聞やニュースを日頃から見たりすることが大切。また、一人で考えることも大切だが、それだけでは考えが深まらないので、家族や友達と意見を共有し、考えることにもっと貪欲になっていきたい」と話していた。

水泳
大上詩央里さん（33H）
イスラエル 世界Jr.選手権に参戦

大上詩央里さん（33H）

大上詩央里さん（33H）が、イスラエルのネタニアで9月4日から9日にかけて開かれた世界ジュニア水泳選手権に日本代表として出場。バタフライの3種目に出場し、予選を通過して準決勝に進出した。しかし、準決勝では自分の泳ぎをすることができず、目標の決勝進出は叶わなかった。

「初海外レースでとても緊張したが、海外の選手はとてもフレンドリーで気軽に話してくれてうれしかった。招集所でもGood Luck!と声をかけてくれた。200mはインターハイよりタイムは上がったが、決勝に残らなかったので次は国際大会の決勝で戦えるレベルの選手になりたいと思った」と話した。50mは自己ベストを出し、富山県高校新記録を更新した。

「チームジャパンとしてイスラエルに遠征に行くことができてとても楽しかった。イスラエルの街はとても綺麗で素敵だった」と振り返る大上さんは「積極的に英語を使い海外の選手と仲良くなって、お互いの国のグッズを交換できたことが一番うれしかった。話そうと思ったら単語が出てこないことがあり、英語をもっと勉強してスラスラ話せるようになりたいと思った。貴重な経験ができて感謝の気持ちでいっぱい」と語り、今後について「今回は準決勝までしか行けず『決勝で戦いたい！』と強く思ったので、これから水泳の技術の面と、心の面で成長していき、世界大会の決勝で戦ってメダルをとりたい」と話した。

【大会成績】

世界選手権に臨む大上さん＝イスラエル・ネタニア

50mバタフライ	27秒47	14位
100mバタフライ	1分00秒57	13位
200mバタフライ	2分13秒20	10位

インターハイ、国体でも大活躍

8月17日に北海道江別市で行われた全国高校総合体育大会（インターハイ）では100mバタフライ決勝で、1分00秒06で3位に入賞した。

予選で大会新記録を出した最大のライバルが隣のレーンにいたが、「自分のレースをしよう」と言い聞かせた。前半を4番手で折り返すと、後半は持ち味の伸びのある泳ぎで追い上げ、一つ順位を上げてゴール。

前日の200mバタフライ決勝はレースをリードしながら「ラスト50mでバテてしまって」3人に抜かれて4位に終わり、表彰台を逃した。「悔しい気持ちをバネにしよう」とメダルを手にし、「最後まで諦めなくて良かった」と話した。

9月22～24日には鹿児島国体にも富山県代表として出場。200mバタフライで5位、メドレーリレーで8位という成績を収めた。

さらに、10月21日には25mプールで争う日本短水路選手権が東京アクアティクスセンターで行われ、200mバタフライで2分9秒67で8位入賞した。

国際大会、そして五輪出場が目標

今後の目標は「来年3月の日本選手権の決勝で、パリオリンピックの派遣標準記録を突破すること。オリンピック代表になりたい。今のレベルでは全然届かないので、日々の練習に励み、メンタル面でも成長して、最高の結果になるように挑戦したい」と話す。

「支えてくれているコーチや家族に感謝し、大学生になってもさらにレベルアップしていきたい。パリやロサンゼルスオリンピック、国際大会で活躍できる選手になりたい」と先を見据える。憧れの存在は同じ種目の第一人者、池江璃花子だ。

2位に入賞
Make Friends Cup in Fukui ディベート大会

Make Friends Cup in Fukuiに出場したディベートチーム＝福井県教育総合研究所

第5回Make Friends Cup in Fukui（北陸ブロック大会）が9月18日、福井県坂井市の福井県教育総合研究所で行われ、本校Aチームが2位となった。メンバーは、市村翼（31H）、松本梨佐（31H）、河合美春フランシス（21H）、坂西容（21H）、水本リアナ（21H）、大場愛真（11H）の6人の皆さん。

北陸地区の14チームが参加。論題「日本政府は、代理出産を合法化すべきである。是か非か」について、肯定側、否定側に分かれて、4人1組のチームで対戦した。

3位ベストディベーターに選ばれた河合さんは「とてもうれしかった。コロナ禍で、これまでどの大会もオンライン開催だったので、初めての対面での大会にとても緊張したが、チーム2位という成績も、皆で最善を尽くした結果だと思う」と話した。

かざぐるま

SDGs、すなわち「持続可能な開発目標」が2015年9月の国連サミットで掲げられてから、今年で8年目となる。達成期限である2030年まで、残り7年となった★今では世の中に広く浸透したSDGsという概念だが、具体的にどのような活動が行われているのかを知るため、私たち新聞部は富山県内のいくつかの中学校に取材した。その結果、各中学校で様々な取り組みが行われていることがわかった★例えばある中学校では、ジェンダー平等の観点で女子の制服にスラックスを導入したり、自分の性について悩んでいる生徒に体操服登校を許可したりしているそうだ。他にも、ペットボトルのキャップや古本の回収といった廃棄物を減らすための活動など、幅広い活動が行われていた。そしてそれらの中には、生徒会や委員会が企画して運営している活動も多い。ボランティア活動では、地域周辺のゴミ拾いや老人ホーム訪問などを行い、応募型で生徒達が主体的に活動に取り組んでいた★一方で国際高も、ユネスコスクールということもあって、学校全体でSDGsについて様々な取り組みを行っている。1ドリンク購入につき1円が国境なき医師団に寄付される自販機の設置、ユニクロ主催の「届けよう、〝服のチカラ〟プロジェクト」への古着の提供、中学校と同様のペットボトルのキャップ回収の他、いろいろな活動に取り組んでいることを私たち自身が自覚しているだろうか★国際高がどんな活動を行っているのか、その活動にどのような意義があるのか、国際生自身が意外なほどに知らない。しかし、それでは問題だ。SDGsというのは、私たち一人ひとりが「自分ごと」として考えていかなければ決して達成できないものだからだ★生徒会やユネスコ部を中心に行われている活動を一般の生徒たちも知り、協力して盛り上げていく必要があるだろう。自分たちから積極的に活動に参加し、新しいアイデアがあれば提供するようにしていきたい。それが、2030年までに私たちができることの一つだ。【土田夏帆】

国際高で育んだSDGsマインド

GUで「服のチカラプロジェクト」に携わる山森スーザンさん（2004年卒業）にきく

笑顔が素敵な山森さん

ブラジルでの貧困が原点

本校国際英語コース出身で、現在は県内のGUに勤務する山森（旧姓・木村）スーザンさん（2004年卒業）ユニクロ・GUを展開するファーストリテイリングがUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）とともに取り組む小・中・高校生対象の参加型学習プログラム「届けよ服の力チカラプロジェクト」に携わっていると聞いた新聞部は、山森さんに話を聞いた。

国際理解講座で夢育む

ブラジルに生まれ、日本人の父親と現地の女性との間に生まれた山森さん。国際的に活躍する人物に憧れ、将来は何か自分にできることをしたい、と小さい頃から夢を膨らませていた。

11歳で来日、高岡市に住み、日本語を覚えるのに3年以上かかった。その間、「ブラジルでは貧困の家に住んでいたので、とても恥ずかしかった。学校に通うのも嫌だった」と話してくれた。

ダンスが好きで、当時は県内の高校で唯一だったトワリング部がある国際高へ。「英語も話せるようになりたい」と入学を決意。「英語の授業は楽しかったが、ほかの教科は苦手で、ほとんど勉強していなかった。当時はコロナ禍で授業のほとんどがオンライン授業だったため、ようやく昨年、北欧旅行に行くことができた。ブラジルでの貧困が原点にあるからこそ、自分の目で見て、肌で感じることが大切だと改めて思った」と話してくれた。

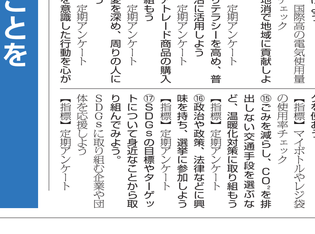
立山中央小で出張授業

9月末、当時生徒の先輩たちが通った立山中央小学校PTAから、家族にブラジルの影響を与えた」と聞いた山森さんが学校と働きかけ、実現した。

「ファッションを楽しみたい」と回答した生徒たちに、その服を選ぶ理由を尋ねると、「着心地がいい」「自分らしさを表現できる」「流行に敏感でいたい」などの意見が出た。

その後、改めてGUに採用されるポイントを聞くと、「着心地や、デザインの好みなどは人それぞれ。だからこそ、自分らしさを表現できる服を選んでほしい」と話した。

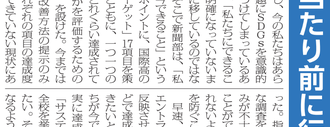
最後に、「服の力チカラプロジェクト」で寄せられた子ども服の着方を実演。「服の力チカラプロジェクト」で寄せられた子ども服の着方を実演。「服の力チカラプロジェクト」で寄せられた子ども服の着方を実演。



5年生の前で出張授業する山森さん（右）＝立山中央小

国際生だからこそできることを

本校も2018年の初年から参加している服のチカラプロジェクト。寄せられた子ども服の着方を現在、アフリカ、アジア、中東、ヨーロッパの順に多い。最も多いアフリカは、今でも靴下すら履いていない子どもたちが多いことが理由は、昨年9月から始まったロシアとウクライナの戦争が原因とする。



本校の服のチカラプロジェクト募集箱

笑顔が素敵な山森さん

立山中央小で出張授業

9月末、当時生徒の先輩たちが通った立山中央小学校PTAから、家族にブラジルの影響を与えた」と聞いた山森さんが学校と働きかけ、実現した。

「ファッションを楽しみたい」と回答した生徒たちに、その服を選ぶ理由を尋ねると、「着心地がいい」「自分らしさを表現できる」「流行に敏感でいたい」などの意見が出た。

その後、改めてGUに採用されるポイントを聞くと、「着心地や、デザインの好みなどは人それぞれ。だからこそ、自分らしさを表現できる服を選んでほしい」と話した。

最後に、「服の力チカラプロジェクト」で寄せられた子ども服の着方を実演。「服の力チカラプロジェクト」で寄せられた子ども服の着方を実演。「服の力チカラプロジェクト」で寄せられた子ども服の着方を実演。

5年生の前で出張授業する山森さん（右）＝立山中央小

国際生だからこそできることを

本校も2018年の初年から参加している服のチカラプロジェクト。寄せられた子ども服の着方を現在、アフリカ、アジア、中東、ヨーロッパの順に多い。最も多いアフリカは、今でも靴下すら履いていない子どもたちが多いことが理由は、昨年9月から始まったロシアとウクライナの戦争が原因とする。

本校の服のチカラプロジェクト募集箱

国際高で育んだSDGsマインド

GUで「服のチカラプロジェクト」に携わる山森スーザンさん（2004年卒業）にきく

ブラジルでの貧困が原点

本校国際英語コース出身で、現在は県内のGUに勤務する山森（旧姓・木村）スーザンさん（2004年卒業）ユニクロ・GUを展開するファーストリテイリングがUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）とともに取り組む小・中・高校生対象の参加型学習プログラム「届けよ服の力チカラプロジェクト」に携わっていると聞いた新聞部は、山森さんに話を聞いた。

国際理解講座で夢育む

ブラジルに生まれ、日本人の父親と現地の女性との間に生まれた山森さん。国際的に活躍する人物に憧れ、将来は何か自分にできることをしたい、と小さい頃から夢を膨らませていた。

11歳で来日、高岡市に住み、日本語を覚えるのに3年以上かかった。その間、「ブラジルでは貧困の家に住んでいたので、とても恥ずかしかった。学校に通うのも嫌だった」と話してくれた。

ダンスが好きで、当時は県内の高校で唯一だったトワリング部がある国際高へ。「英語も話せるようになりたい」と入学を決意。「英語の授業は楽しかったが、ほかの教科は苦手で、ほとんど勉強していなかった。当時はコロナ禍で授業のほとんどがオンライン授業だったため、ようやく昨年、北欧旅行に行くことができた。ブラジルでの貧困が原点にあるからこそ、自分の目で見て、肌で感じることが大切だと改めて思った」と話してくれた。

韓国高校生の訪問団が来校

今年はリアル相互交流

外務省が推進する対日理解促進交流プログラム「JENESYS」の一環として、日韓文化交流基金が派遣する韓国高校生の訪日団が10月24日、本校を訪問し交流した。

本校生と一緒に書道体験を楽しむ韓国の高校生達

この交流は、昨年行ったオンライン交流会の継続で、今年は実際に相互訪問を行うことになり、本校生15人も11月に韓国を訪問することになっている。

今回、来校した一行は、韓国全土から選抜された高校生31人と引率者4人。10月22日に来日し、都内での活動を経て、23日夜に新幹線で富山に移動。24日午前、富山市役所を表敬訪問し富山市のSDGsの取り組みについてレクチャーを受けた後、本校を訪れた。

光彩ホールでの歓迎式では、本校生徒が学校紹介やSDGsの取り組みについて韓国語でプレゼンテーションすると、歓声が上がっていた。八尾中学校出身の本校生5人から踊りを優美に披露。続く食堂体験では、弁当のメニューやKポップについて国際生と流ちょうな日本語で話すなど、早くも盛り上がりを見せていた。

午後の華道体験では、本校から韓国を訪問する15人のバディ生徒と協力して花を生けたり、英語授業体験ではペアワークやグループワークを行ったりした。

その後の異文化交流会では、書道、こま回し、けん玉、コマ回しなどの体験をし、各自が選択して日本文化を体験し、それについてグループごとにディスカッションした。また、部活動体験では男子バスケットボール、弓道、女子サッカーの3種目に分かれ、本校の部員達と汗を流しながら交流した。これは、韓国の学校では部活動がないという交流イベントも開かれ、韓国の高校生達と本校生15人を含む高校生が交流した。

この日の夕方には、富山市総曲輪通りで「高校生ワイガヤナイト」という交流イベントも開かれ、韓国の高校生達と本校生15人を含む高校生が交流した。これは、韓国の学校では部活動がないという実態や要望から実施された